

有能でもNo.2失格の男

荒田の欠点は痛みに鈍感な（我慢強すぎる）こと、口が悪い（思いやりにない）ことと一つ、思ったら即実行することである。社長に報告して許可を得ればいいのに独断専行し、後で社長が知って叱る。こんなことが何度もあり、この「身から出た錆」でついに会社を辞めるハメに到った。

年収一千万円を手にするまで

おどろおどろしい「地獄の特訓」の半分の広告を毎週のように日本経済新聞に載せた。朝日新聞の募集欄に管理者養成学校の講師候補の募集広告を毎週のように載せた。佐川急便の運転手募集の五〇行広告と同様に目立っていた。

静岡県の富士宮市の外れに五十人宿泊できる私設の廃校があり、荒田が「発見」し交渉して借り受けた。一回の生徒が百人になったので一人部屋に二人泊めた。百人を超えるると近くにある家主の豪壮な別宅に十人二十人泊めた。講師候補の面接は荒田がした。二十代から四十代までの男性。まるで新撰組の隊士募集さながら、あぶれ浪人が集まってきた。学校教師や塾講師が何人もいた。前科はつかないが「問題」を起こしてクビになった面々である。荒田は「即戦力」を期待して採用したが、長く残った者はひとりもいない。百人面接して十人採用。訓練教

育して三ヶ月後助手として現場に出せるまで残るのが五人。自分より若い講師に追いつたてられていやになって辞めるのが二人。月三人、一年で三十人の助手ができた。うち三年後、一班十五名の生徒を担当できる講師が務まるようになるのは三人。

経営講座 413 染谷和巳

講師助手が足りないので営業部の社員が駆り出され、若い女性社員もみな富士宮勤務になった。荒田ははじめ主な社員は富士宮のマンションやアパートに寝泊まりし、新人の助手は単身赴任で、借りた一軒家の大部屋で雑魚寝した。建設土木の飯場ほどではないにしろ、しだいに人心は荒み、町の居酒屋はうるおったが、男女の風紀は乱れた。

「発展途上の過渡期」であった。丸二年が経ち講師助手の数が揃い質も向上し、採用面接と指導をする講師ができて、荒田はその任を解かれ古巣の営業に戻った。役員も常務取締役昇進。部長になったのが三十三歳で今四十三歳。部下や妻から「万年部長」とからかわれてきたのがようやく解消した。

お灸が効き過ぎ荒田は辞めた

浜松町に戻った荒田は営業部隊作りを始めた。カセットテープ教材の販売は女性パート社員による無料聴聴制度で成功した。訓練という新製品はDMや電話だけでは売れない。営業課長や若い男性営業マンは皆富士宮に向いている。講師の募集同様、また中途採用の社員募集。男女十人の中年営業部隊ができた。訓練のお客様を開拓する訪問営業が専門である。新人営業マンにとって、十三日間の地獄の訓練参加が何よりの新人教育になった。交通費宿泊費のかかる遠隔地は荒田が回った。東京と近辺を営業マンが回る。

教材販売は電話とDMと配送で済んだが、生徒募集は直接対面の営業マンがいる。何度も訪問して人間関係を作る旧来のスタイルが求められる。九州から北海道まで

神宮前のビルに移転していた。姉妹会社三社が壁で仕切って使用。七十人が同居。電話をかけるなど仕事をしている社員がそのまま映像に入ったりしていた。主題歌一人は叱られて育つ」は荒田が作詞。

嵐が去った後のオフィスの窓に樺の若葉がまぶしいで始まる歌である。荒田が会社を辞めた後、パンフレットはもちろん、カセット教材のパッケージやテキストに入っていた荒田の名前は一切消し去られ、過去に荒田という人間は会社に存在しなかったとされた。おそらく作詞荒田新も削り取られていることだろう。

昭和六十一年に制作開始、年末に完成し六十二年に発売。荒田は映画館の大スクリーンに写す試写会を行った。会場は企業の担当者と多くの報道記者で埋まった。四部のうち一部「遅れた報告」を三十数分放映。デモテープに交通費を備えて三十余名の記者に贈呈。有名俳優の出演なので新聞、雑誌、テレビが一斉に報じてくれた。一カ月で売上げは一億円を超え、二カ月目も五千万。制作費総計四千万円に否定的な顔を

昭和六十三年三月末、退社が正式に認められた。四月に社内送別式。百人の前で挨拶。例の大作の棟梁のような人が好きだと言った本社経理の秋田美人が目赤くして大きな花束を贈ってくれた。まだ独身のその人はその後一年たらずで退社した。夜の送別会には社長も出席。作曲の元橋専務がビジネス最前線の主題歌一人は叱られて育つ」を歌った。社長が「こんないい歌だったんだね」と荒田に言った。

映画では横光克彦が歌った。「下手だからいやだ」と断るのを荒田が無理に頼んで歌ってもらった。確かにうまくなかった。社長はそれを聴いて作詞も作曲もダメな歌と思っていた。その評価を専務の歌唱力が変えた。

五月、一泊二日の伊豆稲取での幹部会に誘われた。もう辞めた人間がなぜと思ったが、まだ退職金をもらっていないので行った。幹部は不審な顔をして呼んだ。荒田の翻意を願って呼んだのだ。翌朝早く荒田は一人ホテルを出て釣船に乗った。客は荒田一人。形のいいイサキを二十匹釣って東京へ戻った。

退社後敵意を持たれない工夫

退社後敵意を持たれない工夫。荒田は退社後、社長に謝罪状を渡した。社長は「お灸が効き過ぎた」という顔だった。